

防除指針 I

花き

9. 花き

作物	農薬名	特性	対象雑草名	処理法	使用上の注意事項
花き類	ザクサ液剤 グルホシネートP ナトリウム塩 11.5%	非ホルモン型吸収移行性の非選択性除草剤であり、体内に移行し、グルタミン合成酵素の作用を阻害し、アンモニアを過剰に蓄積させ光合成を阻害し殺草する。	一年生雑草	雑草茎葉散布	1. 雑草にのみ散布し、作物には薬液がかからないように注意する。 2. 散布後1時間以内の降雨は効果を減ずることがあるので、天候をよく見極めてから散布する。
きく（露地栽培）	トレファノサイド乳剤 トリフルラリン 44.5%	非ホルモン型の除草剤で、根部及び幼芽部から吸収され、側根の形成を阻害したり、幼芽部の細胞分裂を阻害し、発生を抑制する。	一年生雑草（ただし、ツユクサ科、カヤツリグサ科、キク科、アブラナ科を除く）	うね間 土壌散布	1. 雑草発生前までに使用する。 2. 作物にはかからないように使用する。 3. トンネル、ハウス内での使用は避ける。
きく	ナブ乳剤 セトキシジム 20.0%	非ホルモン型吸収移行型の選択性除草剤であり、イネ科雑草の茎葉部及び根部から吸収され、生長点に移行し、分裂細胞組織の伸長を抑制し、殺草する。	一年生イネ科雑草（スズメノカタビラを除く）	雑草茎葉散布	1. イネ科雑草（スズメノカタビラを除く）優占圃場で使用する。 2. イネ科作物にかからないようにする。 3. 遅効的であり、完全に枯殺するまでに7～10日を要する。 4. 冬期の低温時や出穂期以降など、雑草の生育が停止しているときは効果が劣る。
きく	ゴーゴーサン乳剤 ペンディメタリン 30.0%	非ホルモン型吸収移行性の除草剤であり、根部または幼芽部から吸収され、生長点の細胞分裂を阻害し、殺草する。	一年生雑草	全面土壌散布	1. 雑草の発生前に散布する。 2. 処理後一部雑草の発生が見られることがあるが、その後生育は停滞し、やがて枯死するので、処理後間もない中耕除草は避ける。 3. イネ科及び広葉の一年生雑草には効果があるがキク科雑草とツユクサには効果が劣る。 4. 土壌が過乾、過湿のときは使用を避ける。 5. 有機質の少ない圃場では薬量を少な目にする。 6. 苗床では使用しない。 7. 播種後に使用する場合は、覆土をていねいに行う。 8. 激しい降雨が予想される場合は使用を避ける。

10. その他

その他

作物	農薬名	特性	対象雑草名	処理法	使用上の注意事項
林木、畑作物	ラウンドアップマックスロード グリホサートカリウム塩 48.0%	非選択性の吸収移行型の除草剤で、茎葉部から吸収され、主として芳香族アミノ酸の生合成阻害によって殺草する。	竹類（畑地、林地、放置竹林）	竹桿注入処理	1. 使用する畑地で栽培されている作物がある場合は、作物ごとに定められたグリホサートの総使用回数を遵守する。 2. 侵入竹に使用する場合は隣接する竹林等の所有者と協議し、了解を得てから使用する。 3. 処理竹から15m以内に発生したタケノコを食用としない。また、縄囲いや立て札により、その範囲のタケノコが採取されないようにする。
水田作物、畑作物（休耕田）	ラウンドアップマックスロード グリホサートカリウム塩 48.0%	非選択性の吸収移行型の除草剤で、茎葉部から吸収され、主として芳香族アミノ酸の生合成阻害によって殺草する。	一年生雑草（休耕田）	雑草茎葉散布	1. 散布薬量・散布水量は雑草の大きさによって加減する。 2. 雑草が大きくなると効果が劣るので、早めに散布する。 3. 付近の作物にかからないようにする。 4. 散布前に雑草の地上部を刈り払わない。 5. 通常2～7日で効果が発現し、効果完成までにさらに日数を要するので、誤って再散布しない。 6. 散布後1時間以内の降雨は効果を減ずるので、天候をよく見きわめてから散布する。
			多年生雑草（休耕田） スギナ（休耕田）		
水田作物、畑作物（休耕田）	パスタ液剤 グルホシネート 18.5%	非ホルモン型吸収移行性の選択性除草剤であり、体内に移行し、グルタミン合成酵素の作用を阻害し、アンモニアを過剰に蓄積させ光合成を阻害し殺草する。	一年生雑草（休耕田）	雑草茎葉散布	1. 散布薬量・散布水量は雑草の大きさによって加減する。 2. 雑草が大きくなると効果が劣るので、早めに散布する。 3. 付近の作物にかからないようにする。 4. 散布前に雑草の地上部を刈り払わない。 5. 通常2～7日で効果が発現し、効果完成までにさらに日数を要するので、誤って再散布しない。 6. 散布後6時間以内の降雨は効果を減ずるので、天候をよく見きわめてから散布する。
			多年生雑草（休耕田）		